

保険がどのように役に立つのかー消費者側から見た保険史（1）

保険商品を購入すると、万が一の時に役立つということは誰でも承知している。しかし、保険に入っておけば安心だというが、その安心のためにどの程度の対価を支払っているのかよくわからない。そのため安心に対して重複投資しているのではないかと心配だが、保険商品が複雑なのでよくわからない。

旦那の収入が右肩上がりであり、好景気でパート収入が伸びるようなら気にならなかった保険料の家計負担が心配な主婦の増大。「保険は店舗で待っているだけでは売れない」という神話が崩れ、いわゆる保険ショップが発展した背景には、このようなことを背景にした、保険の見直し需要があったといわれている。

現代の消費者にとっては、保険産業の社会的意義よりも、自分にとって合理的な保険の選択の方に関心が向いているのかもしれない。この点については至極当然であり、異議を唱えるつもりはない。しかしながら、歴史を紐解けば、保険業の公共性が強調された時代があったし、また貯蓄増強という国策の一環としての生命保険の存在が強調された時代もあった。いわゆる保険の自由化以降、保険事業の公共性や公益性について強調されなくなっているように思われる。

本来は税金を使って行うべき仕事を、民間保険会社や共済団体が行なう必要はなく、また逆に税金の補助を受けることも問題がある。輸出入保険がカバーするカントリーリスクや農業共済が扱う特殊な農業保険などの、産業育成的な観点による経済政策保険を除けば、基本的にはマーケットに委ねるべきだと思う。

かつては民間と政府機関の中間的にあり、独特な存在感をもっていたのが簡易生命保険である。簡易生命保険は、イギリスの郵便保険を参考にして導入したといわれている。イギリスでは、有名なグラッドストーンが、庶民に対して簡易保険会社が「高い保険」を販売しているという批判を受けとめて、郵便局という組織をとおして生命保険を販売する制度を築いた。日本でも、同じように少額の生命保険を提供することによって、庶民の生活安定に資するために大正5年に導入された。

イギリスの郵便簡易生命保険事業についてご関心のある方は、米山高生「イギリスにおける郵便簡易生命保険事業の試みーグラッドストンの提案とその理念の検討を中心に」『経営論集』第47巻、2、3合併号、2000年を参照されたい。ここでは、わが国の簡易保険に焦点を絞る。簡保の導入時の事情をみると、民間保険のカバーがされていなかったり、また保険が存在しても割高な保険を買わされたりしていたとされる庶民を対象にした社会政策的な保険であったといえる。庶民が割高な保険を買わされていたのが本当であるのか否かについては、次回で明らかにする。

民間保険との違いは、制度的にも明白だった。保険業法とは別個に、簡易生命保険法という法律を制定し、そのもとで運営された。さらに商品では、民間との競合を避けて、保険金の上限を少額に定めた。さらに手元の保険証券を整理しながら気が付いたのだが、民

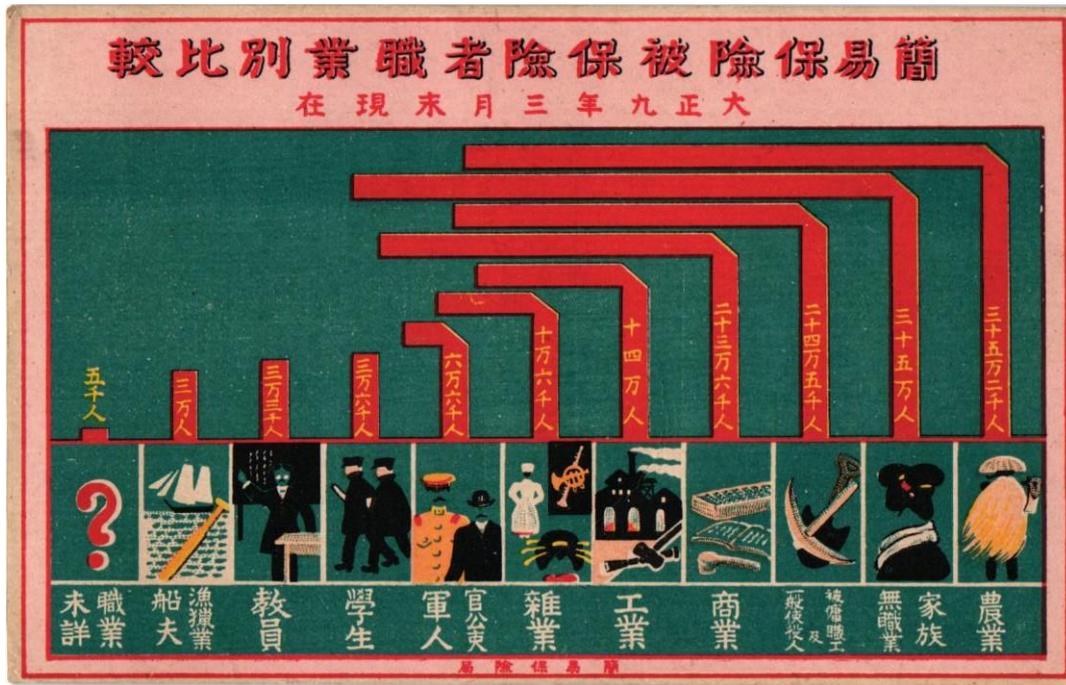
間が保険金から保険料を決めていたのに対して、保険料から保険金を決めていた。つまり民間保険では、保険金額がキリの良い数字であるのに対して、簡易保険は払込保険料がキリの良い数字であった。これは、保険料支払い能力を前提にして保険募集が行われたことを物語っており、戦前の簡易保険の特徴を如実に表しているものといえよう。

さらに興味深いことは、簡易保険の業績や簡易保険が社会に貢献する仕組みについても積極的にアピールしていることである。絵葉書の画像を3枚掲載しているが、いずれも簡易保険局が発行したものである。「保険料はどうなるのか？」という画像は、簡易保険料が保険金支払いの他、公共事業の助成や国民の健康増進に使われていることをカネの循環で示している。なお書き込まれている数字は、簡保の事業統計と辻褄があっていない。

「簡易保険積立金放資状況」では、住宅建設、公設市場および小学校への投資が多いことを示している。なお「放資」は当時の言葉で、金融機関による「投資」のことである。三枚目で「被保険者職業別比較」まで明らかになっているのが面白い。「家族無職業」というのは婦人と考えられる。このことから民間保険が一家の主が加入したのに対して、簡易保険は家族の構成員も個別に加入していたことがわかる。このことは収集した保険証券からも裏付けられる。初期簡易保険（大正九年）においては、「農業」、「家族」、「被傭職工および一般使役人」、および「商業」の4種類でほとんどを占めていたことが分かる。

同時期の民間保険会社に保険料がどのように社会の発展に役立っているのかということをおアピールする広告は見当たらない。その理由は、簡保がその導入時期において、社会政策的な目的をおびていたためであろう。他方、契約者の立場からいえば、零細であればあるほど、自分の保険料が社会のお役に立っているということに対する誇りが大きいのではなかろうか。だとすると、初期の簡易保険が日本に根付いたひとつの理由は、零細な庶民に存在するそのような誇りを簡易保険側が大事にしたことにあるのかもしれない。

これに対して、民間保険が保険資金の循環の効用を強調するようになるのは、戦時経済において戦時国債の市中消化に協力する体制になってからのことである。保険の効用についてどのような側面を強調するかということは、多分に時代性を含んでいるのである。戦時経済期の史料は比較的多いが、ここでは、第一徴兵による画像をあげて結びとしたい。



我等の貯蓄と新東亜の建設

お父さんや兄さんは東亜新秩序建設の爲に勇しく戦つて居られます！

節約してコドモの保険に加入しませう！

第一徴兵

金資充拡力産生

御愛兒の保険料は？
かうして國策に用ひられます

お預りした保険料は會社を通じて戦時公債に消化されて砲彈となり飛行機となり、皇軍の武威を輝かす原動力に振向けられるのです。

一は國家發展の力となり、一は御一家の將來を守る御愛兒の貯蓄ともなり、實に保險こそは一石二鳥の理想的貯蓄方法です。

國民の所得

公債の買入

國防費

保險料

第一徴兵保險株式會社

東京・銀座